

都市景観の形態的特質とその形成要因

窪田陽一*

本論考は、都市の計画的建設に関わる思想の流れを歴史的に概観し、都市空間の形成過程と形態的特質が都市景観とどのように関係するかを論じるとともに、そのような都市形態と景観を生じるに至る社会的背景並びに思想的基盤を整理することを試みたものである。欧米でルネサンス以降に計画的に作られた都市では全体の幾何学的な統一性を志向し持続させようとする傾向が強いが、日本の都市ではそのような統一性・持続性に欠けている。そして多様化する景観の調整が20世紀後半以降大きな課題となっている。

Formative Characteristics of Urban Landscape and their Constituent Factors

Yoichi KUBOTA*

This paper overviews historically the stream of thoughts on planning and construction of cities, and by contemplating the relationship between the formation process and formative characteristics of urban space and landscape, also tries to clarify the social backgrounds and epistemological fundamentals to result urban form and landscape. In European and American cities strong tendencies to orient and maintain the overall geometrical unity of the city built by planning after Renaissance are observed, however, in Japan most cities lack in such unity and persistency. Moreover, adjustment of diversified landscape becomes serious challenge since late 20th century.

1. 緒言

本稿は古今東西の都市の景観が、場所ごとに異なる形態を見せる一方、異なる場所で同時代的に類似した景観が出現している場合があるという歴史的な事実、即ち場所的・通時的な差異と類似に焦点を絞り、それらの背景にあると考えられる形成要因について考察を試みるものである。

2. 都市の起源と都市景観

2-1 都市の計画的形成と景観

都市はその起源から計画的に形成されたかという問いは、必ずしも明確に答が得られているわけではない。人類の歴史上、都市を計画的に建設する行為の形跡が見られる事例は、現在確認できる遺跡からのみ推測するとして、およそ6千年前と言われる。都市とは何かという定義を詳細に展開することは差し控えるが、多数の建造物が近接して集合している場所を都市と見なす単純な定義を受け入れるとすれば、都市の景観は都市が誕生したときに生まれたことは自明である。しかし都市が計画的に形成されることと景観が計画的に整序されることは必ずしも同一の事象ではない。都市の計画原理と景観構成の関係がどのように意識されていたかという問いに関して、欧米の都市の歴史書には詳しい解説が多いが^{2,5,21,22}、日本国内では必ずしもこの点に着目した文献は多くない。都市の計画的形成の当初から都

* 埼玉大学大学院理工学研究科環境制御工学専攻教授
Professor, Dept. of Environmental & Human Engineering,
Faculty of Science & Engineering,
Graduate School of Saitama University
原稿受理 2003年11月25日

市景観の意図的・意識的な整序を目的として掲げ、達成した事例に着目することは、都市景観が持つ意味を考える上で重要な示唆を与えるものと考えられる。

何らかの形態的特質を備えた都市景観が実現されるためには、最終的に市民が体験する現実の環境の視覚像を重要なものとして自覚的に認識し、計画・設計のあらゆる段階で常に意識し続ける思考過程並びに意思決定に関わる社会的過程が共有され持続的に存在することが必要である。現代の都市社会においてはそれが困難化する方向へ変異してきていることを予め指摘しておきたい。

2 - 2 都市景観の宗教的意味に対する意識の誕生

景観を意識して都市を意図的に形成しようと試みた事例は、考古学が明らかにしてきたとおり紀元前に遡る。神々の世界と精神を共有していた人々が築いた古代の都市では、現代では経済的に実現不可能なほど壮大な規模の建造物を時の為政者が構築し、人心を圧倒した。膨大な労力と日数を必要とするこれらの建造物の大半は、神殿や墳墓等の象徴的な宗教的施設を中心とするものであり、日常の理解を超えた自然界の力との関係を安定化させることができる場となること信じられたと考えられている。これらの宗教的な意味を明確に付与された古代都市には、都市の平面計画だけでなく地上で眺められる景観に至るまで、正確な幾何学に基づいた形態が用いられた事例が多く見られる。即ち都市の視覚形態である景観を人為的に形成する手法として幾何学が優先的に適用された証左である。幾何学が重視された理由は、抽象的な知識の成熟に先立って、環境の意味を解釈しまた付与する経験科学の記述方法として、視覚を媒介とする具象的な方法が最も伝達可能性が高かったからであり、その最も明瞭なものが環境の視覚像としての景観なのであった。

紀元前2世紀に建造され5世紀から7世紀頃に最盛期を迎えたメソ・アメリカの宗教都市テオティワカンには、台形のピラミッドが一直線の軸線をなす道路の両側に対称に配置され、道路の軸線は道路の終端部にあるピラミッドの背後にそびえる山の頂上に正確に向かっており、景観の幾何学性が明瞭に意識されている。環境の視覚像への自覚が既に古代からあったことは明らかである。それを景観という概念で認識していたかどうかを論じることは難しいが、星座に代表される天文現象を含めて、環境を構成す

る要素の視覚的配列に深い関心を寄せていたことは事実である。しかし人間が日常生活を楽しむための場として都市の景観を形作ろうとした時代は安定した市民階級の生活と表裏一体の関係にある。

2 - 3 日常的都市景観への意識の覚醒

市民が生活する都市空間そのものの景観を、ある形式に従って整除するという行為はエトルリアの影響を受けて紀元前7世紀頃に建造された古代ローマの諸都市にも見ることができ、近世社会だけの所産ではないことは確かだが、近世都市のように都市の平面形態が幾何学的に整形化されることは、都市景観を幾何学的に整除するための必要条件ではあるが十分条件ではない。都市生活の場の眺めを意図的に整えることは、社会が政治的に安定していることと同時に、都市景観への意識が市民の間で覚醒していることが前提となる。少なくとも都市景観に関しては、そこに居住する人々の、都市の作り方に関する考え方を反映していることは確かである。

これらの点に着目したコストフは、意図的に形作られた都市と自然発生的に集合してできた都市に二分して論じている^{21,22)}。前者は強大な権力と意志に基づいて一貫性のある構成体として構想された都市空間を現実化したものであり、大半の事例において幾何学的な整形化が行われている。後者は全体を統括する共通感覚も強い意志や権力の作用もなく出来上がった凝集型都市空間を構成する都市である。これらの区別は都市景観の成立過程と結果の差を説明する上で重要な点である。

2 - 4 経済の発展段階と景観意識

支配階級と都市改造は古今東西常に存在してきた。古代においては軍事と政治を司る階級の世界認識が強権的に都市改造をもたらしたが、中世以降は様相が異なる。莫大な富を得た商業資本による都市景観の競争的形形成は、きわめて世俗的な動因によるものではあるが、歴史上の事実である。アドリア海の真珠と言われたベネツィア公国のサンマルコ広場（15世紀初頭）や、メディチ家が君臨したルネサンスの都フィレンツェ（13～15世紀）などの都市景観が、ルネサンスに確立された透視画法に基づいて都市景観を専門に描く画家ヴェドゥーティスタ(vedutista)たちの格好の題材となり、それらに刺激を受けた専制君主国家がひしめく近世欧州の各地に都市改造の一大ブームを巻き起こす契機となった。

経済的蓄積の都市景観の表現は、11世紀頃から展開したハンザ同盟の諸都市にも顕著に現れている。

ゴシック的都市として知られるベルギーのリエージュ (Liege)、ゲント (Gent) などに多く見られるフランポワイヤン・ゴシックと呼ばれる、ステップ・ゲーベル (階段状の妻側破風) を火焰状の装飾により造形した都市建築が建ち並ぶ町並みは、今日でもそのままの姿で眺めることができる。ベルギーの首都ブリュッセルの都心に位置するグラン・プラス (Grand Place、15世紀) は文豪のビクトル・ユゴーが「世界で最も華麗なる広場」と賞賛した。これらの都市建築は当時の有産階級が蓄財の一環として競争的に建設したものであり、それが代々継承され都市の資産となっている。

一方、18世紀から19世紀にかけて世界経済の牽引役となったイギリスに発祥した産業革命が後期のバロック的都市計画の推進力となったことも都市景観の計画的形成の点で重要な事実である。産業革命は都市構造を大きく変えた。特に新興工業の産品を競う博覧会の開催を契機とする都市空間の改造や、後述する鉄道の導入による都市空間の視覚構造の再編、即ち鉄道の駅舎を都市景観の中にどのように位置づけるかは、重要な課題となった。

2 - 5 社会階層と都市景観

専制君主国家が競い合った産業革命前夜のフランスではルイ王朝が16世紀に、そして19世紀半ばの産業革命期にはナポレオン3世が、強大な権力の表現として整然とした都市景観を現出させるパリ大改造に着手する。それは社会階層と都市空間の関係としても読み解くことができる。パリの街路や広場そして公園は劇場と同様に紳士淑女の社交場となり、マンサール屋根で統一された表通りの町並みに居を構えることは市民としての社会的地位を確保していることをも意味した。このようなバロック的都市の景観形態は欧州各地の都市で模倣され、またそれぞれの都市における固有の様式を生み出すこととなる。

他方、厳格な身分制と土地利用区分が布かれた日本の江戸時代には、武士階級の中でも石高に応じて門構えや塀、家屋に対して格式を定めた藩が多かった。分相応に屋敷の外観を整えることは、武士としての体面に関わる規律として重視された。最下級とされた商人が経済の実権を握るようになった江戸時代後期には、酒田の本間家のように上級武士と見まがう屋敷を構え、門かぶりの松と呼ばれる植栽の作法を守った。広大な屋敷を囲む塀がもたらす閉鎖的な景観に対して、敷地の内側から意識的に松の枝を外側に伸ばし形を整える技法は、屋敷の主人の出入

えあるいは見送りの挨拶を代理的に表現する象徴的な手法と言われる。町民階級が暮らす市街地に建ち並ぶ町屋に関しても、華美を抑えた一定の範囲の中で大工仕事の技量を競う形態が多用された。防火建築である蔵造りや卯建など地域固有の解決手法がありはしたが、全体として基調が整った町並みであったことは伝統的建造物群として保存指定されている町並みからも明らかである。

2 - 6 公共空間と私有空間の関係

欧州の歴史を辿ると都市景観は公的な空間の表情として認識されてきたと言えるが、それは公私の区別に対する意識の醸成とも関わっている。公私の概念的区別がいつごろ成立したかは、地域社会によって異なると同時に、公私の空間を隔てる境界に関する認識も、それぞれ異なるものがある。石造建造物の文化を有する地域社会では、強固な壁と扉の存在に象徴されるように、公私の境界がかなり明瞭に意識されてきたが、外部の都市空間に面する部分は常に不特定多数の目に触れるという意味で公的性格を有すると考えられた。

イギリスのスクウェア (square) 並びにコモン (common) は、原則として所有権あるいは利用権を持っている住民しか立ち入ることができない。多くの場合、周囲に柵がめぐらされ、扉がついた門が設置されている。そこには必ず “Private Property” の表示が掲げられている。イギリスの土地の多くは貴族や資産階級の所有であるが、閉鎖された区域とすることにより地域社会の交通にとって障害となる場合は “right of way” あるいは “equity” の概念により一般市民の通行を認めることとされている。このように有産階級の私的空間の公的性格を認める考え方は、市民階級が社会の大勢を左右するようになった産業革命期に広まったと言える。

欧州初の市民公園 (Buergers Park) をブレーメン (Bremen) 市内に設けたドイツでは、市民の共有財産としての都市空間という概念が強く前面に出ている。革命により貴族階級の資産を市民のものとして獲得したフランスでは、それらを享受すべき対象として認識したようである。江戸期の日本にも入会地や火除地、広見あるいは広小路と呼ばれる広場的な空間はあったが、それらの場所を物理的に規定する境界要素が強固なものではなく、景観として持続した例はきわめて少ない。これらの場所の持続性の差が場所の景観の継承感覚の差となったことが推測される。

3. 都市空間の幾何学的形態と景観

3-1 街路網と都市景観

都市空間の幾何学的形態と街路網の構成は不可分の関係にある。「全ての道はローマへ通ずる」と言われたローマ帝国の国道はローマの市外を囲む城壁に設けられた城門に接続し、市内の要所まで連続する空間として整備されたが、ローマ市外全体が系統的に形成されるまでには15世紀から16世紀にかけてのパチカンによるローマ大改造を待たねばならなかった。それはカトリックの中心地として都市空間を景観的に統合することを目指したものであり、今日まで欧米の都市構造に深く影響を与え続けているバロック的都市計画思想の基点の一つでもある。

一方、都市街路網の代表的なパターンの一つである碁盤目状即ちグリッド状の街路網は、主に古代ギリシャ帝国や古代ローマ帝国の殖民都市に見られるものであり、地形条件を無視すれば短期間に測量と建設ができるパターンとして用いられた。

グリッド・モデルの考え方は、土地の区部所有を短期間に明確にする必要があったアメリカやカナダの都市にも導入され、わが国でも既に古代大和朝廷期に首都である都城で条坊制が導入され、地方統治の拠点となった国府では条里制による区画道路が整備されている。面積算出の容易さ、場所の位置特定を街路または区画の番号で行うこと、視覚的に端から端まで見通せることによる軍事上・治安上の優位性が都市管理における必須事項であったからだが、それとともに位階制の序列を空間的な位置関係として表現する古代中国の科挙制度的な階層構造による秩序形成の考え方も、中国に倣った首都の都城制における条坊制による都市空間構造として反映されている。都市景観が社会の秩序体系を視覚的・形態的に表現する媒体として認識されていたことを意味するとも言える。

グリッド・モデルによる都市空間は、人間の知性による非自然的な景観の創出であり、直線的な輪郭を持つ幾何学的な都市空間は自然に対する人間社会の力の表現としてきわめて明瞭な表明であった。それはバロック的都市の左右相称の都市景観にも共通するが、それ故に森林を基調とする自然を重視する立場からの反発を招いたことも確かである。

一方、城郭の物見塔や天守、教会の鐘楼の尖塔、仏教寺院の多層塔などの人工的なランドマークは、街路空間とは無関係に視覚的な卓越性をそれ自体の

規模により獲得しえた。西欧社会の景観を考える場合、キリスト教的世界観の影響は無視できない。教会の尖塔は周囲の農村までも睥睨する視覚的強度が今でも持続している。このような視覚的優位性をきわめて強く意識して、都市空間が新たな幾何学的原理に基づいた形態を持つようになるのは、ルネサンスを経たバロックの時代となる。

3-2 バロックの視線と透視画法の眼

ルネサンスで世界を魅了したイタリアにおいて、先述したカトリックの総本山パチカンの教皇を中心に展開されたローマの大改造は、教会中心の都市空間形成のあり方を現実のものとした。神の絶対性への従順さを求めるカトリックと人間の自助努力を尊ぶプロテスタントの差は、王権の神格化の都市空間的表現の差としても現れる。ルネサンスの人間中心主義は、透視画法の眼差しを人間に与え、その前奏は神聖な教会という宗教的中心への視線を固定することから始まり、やがて現実の人間社会の側の重要施設を視覚の中心に据えるようになる。

ローマ教皇によるローマの大改造は、ルネサンスの開花をいっそう促進したが、ルネサンスは古典的秩序感覚の回復を志向した社会運動として位置付けられる。ギリシャ・ローマ的秩序 (Greco Roman order) の回帰は、幾何学的完全性を特徴とするが故に、それを理解し現実の空間として完成させるといふ様式主義への固執を導く結果となる。

17世紀のルイ王朝期に活躍したアンドレ・ル・ノートルによるヴォー・ル・ヴィコント、そしてヴェルサイユの庭園と市街地の整備の経験を経て、首都パリそのものの改造が現実展開されるに至る。この壮大な都市改造を自家菜籠中のものにせんと望んだ周辺諸国や諸都市の王侯貴族は、競ってバロックの理想的都市像の実現に走る。バロックは、人間中心主義を唱えたルネサンスの精神を強大な王権による環境改造の形で表現する時代となった。広大な森を領有するに至った欧州貴族達は、視線そのものが貫通する空間を自らの権力で実現することの快感、いわば視線の快楽を表現できる象徴的な直線性を重視した。見通すことができる直線状の空間は、それを實現できる強大な政治権力の存在証明でもある。その点では古代の神話的宗教空間と相同の空間構成原理を持っていた。ナポレオン3世が愛妻への贈り物としてコンピエーニュの森を一直線に一夜で切り開いた空間も、そうした絶対的権力の象徴として生み出された景観に他ならない。



Fig. 1 街路の軸線と建物の正面の中心を一致させたオペラ座（パリ）

3 - 3 都市景観の階層性と意味の多重性

景観構成要素の視覚的優位性あるいは卓越性に着目することは、空間的位置関係を明瞭化することでもある。象徴的景観を形成する公共施設の配置は、古代都市にも顕著に見られるとおり、都市空間の構成原理として東西を問わず行われてきた。

パリのオペラ座（19世紀末、Fig.1）やミラノのスカラ座（1770年代）は、都心の景観の要となる位置に配置され、前面に接続する街路の配置と一体的に計画・設計されているが、同時代の主要な建造物は概ねこのような景観構成を基調とする。

産業革命期のイギリスの功利主義的思想家ベンサムが考案したパノプティコン（panopticon「一望監視装置」と訳されることが多い）は、看守の詰所を中心に置き、獄舎を放射状の通路に沿って配置する、効率的な監視を可能にする監獄の建築構造として実現されたが、帝国の権力を握った階層により治安維持のためにバロック的都市にも応用された。これは都市空間が統治の機構、端的には警察機構の一部として構成されることを意味する。それがビスタ（vista）と呼ばれる直線的な左右対象の街路景観のもう一つの意味である。

一方、富士見通りや富士見坂という地名を持つ街路に見られたように、山をランドマークとして街路の軸線の方角を定める手法は、「山当て」と呼ばれ江戸時代にも多用され、20世紀に遷都されたオーストラリアの首都キャンベラのバロック的な街路配置パターンにも見られるが、遡れば古代ギリシャの首都アテネの港に入る船から望むアクロポリスのパルテノン神殿の背景には、守護神が宿る山の山頂が重なって見えるようになっていた。このように自然の文脈を取り込む多重的な景観構成は、アニミズム的な自然観を持つ社会に多く見られる。

4 . 景観の同一性と差異性

4 - 1 理想都市の景観形態と景観の様式化

理想的都市空間のモデルはさまざまな時代や社会で考案され、あるものは実際に実現された。バロック都市の空間的文法を代表するローマやパリの景観構成は、まさしく理想都市を実現した秀作の典型化という社会過程により規範的景観として参照されることになる。都市景観の規範的統合は都市空間形成パラダイムの一元的規範化という意味を持つ。

産業革命の進展に伴い資本家が政治力を握り、工業に依拠した市民社会の拡大が進むが、都市そのものを根底から作り変える時間はなく、19世紀には古典主義の再復活とも言える新古典主義やネオ・ルネサンス、ネオ・バロックなどの形式的様式主義に基づく装飾的な造形意匠形態が、急速に進む近代技術の産物と、伝統を背負った社会との景観的な調停役を担う表層的な解決手法となった。

西欧社会における都市空間の視覚的構造が幾何学的秩序への固執と表裏一体の関係にあることは何度も述べたが、それは野蛮な自然から離脱した理想的な都市空間の構成原理として追求され、理想的形態とされるプラトン図形への還元的秩序志向を意味する。古典的な都市計画の思想は、神格的理想性あるいは予定調和的完全性が人為的に達成されることを指定する理知主義に依拠しているが、それは純粹主義的な機能主義の都市計画思想にも通底している。しかし様式主義に縛られた都市空間の解放を標榜した機能主義が都市景観に及ぼした影響は大きい。経済効率性と一体化した機能主義に基づく都市空間は、都市景観の解体という代償をもたらした。

4 - 2 都市景観のデファクト・スタンダード

バロック期の都市は景観を意図的に整形することを都市計画の主目的の一つとしたが、方法論化したスタイルはマンネリズムへ傾斜し、表面的な景観形態の引用もしくは複製、移植あるいは転移という波及過程をもたらす。普遍的な幾何学という原理に基づいてはいるが故に方法としての伝達に困難は少ない。それは今日デファクト・スタンダード（de facto standard）と呼ぶ、社会の選択による結果である。

しかし気候風土に起因する局地的な独自性は常に存在する。ドイツの観念論哲学M. Heidegger（1889-1976）は「そのものであること」と「そのものではないこと」の境界の認識が、人間存在の本質に関わる命題であることを論じた。建築界や美術界で様式と

言われるものは、形態やモチーフに同時代的な共通性を求める社会の帰属意識を反映する。同一性と再生の微妙な均衡感覚の上に欧州の都市景観は展開してきたと言える。独・仏・伊・日など諸文化圏における景観に対する意識の差異を歴史的背景とともに論じた著作は少なくないが、普遍性よりも局地的特殊性に基づいた景観の特質は、ヴァナキュラー (vernacular) 即ち土着的な制約条件によるところが大きい。近代化以降の都市景観はそれらとの相克のダイナミズムの中で変容し、あるいは持続してきたのである。

4 - 3 視覚媒体と景観

ルネサンスが回帰するところとなった古代の理想的風景は産業革命期にも様式主義の新解釈を伴って復活する。それには、現前する廃墟を描き続けたロマン主義版画家ピラネージ (Giovanni Battista Piranesi, 1720 1778) の石版画が一役買っている。透視画法を確立したルネサンス以降、都市景観は絵画的表現、即ちピクチャレスク (picturesque) と表裏一体の関係で認識されていた。即ち理想的絵画性を備えた都市空間こそが理想的都市空間とみなされた。

それを実現させた先進的な都市、進歩的な思想を持った為政者や資産家、建築家や都市計画家が鳩首した都市は、他の都市にとって憧憬的となり、多くの人々がそれらの都市を訪れた。その機会を得ない人々にとって、透視画法を駆使して都市景観画を描くヴェドゥーティスタ (vedutista) と呼ばれた画家たちが欧州各地に残した絵画は、各地の都市景観の様相を忠実に伝えるメディアであった (Fig.2)。また建築家パラディオの造形意匠に関する著作は、建築ばかりでなく造園や土木における設計にも多大な影響を与え続け、マニエリスム (mannerism) 即ち手法主義をもたらした。

これらの視覚媒体は規範としての都市景観像を人々に与え、それをそれぞれの都市に応じて翻案することが流行となった。イタリア的都市空間への憧憬はルネサンス期に後進国だった国々でイタリアの景観を持つ理想都市像の実現を動機付ける。絵画に見たイタリア風の理想都市を現実に建設した都市として、イギリスの保養都市バース (Bath) がある。ルネサンスの美意識を前面に押し出したブルジョワ階級社会のための保養地は、視覚的規律を都市空間に生み出しうることを実体験させる場となった。イギリスにはバロック的都市が少ないと言われるが、バ



Fig. 2 ルチャーノ・ラウラーナもしくはフラ・カルネパレによるルネサンス絵画「理想都市の景観」



Fig. 3 区分所有された建物の外観を統一したクワドラント (ロンドンのリージェント通り)

ースの都市景観を代表するロイヤル・クレセント (Royal Crescent, 1775年) は高い評価を得、さらにロンドンのリージェント・ストリート (Regent Street) に見られる四分円弧により街路を整形したクワドラント (quadrant) の手法は、上流社会が生活する地区の象徴的景観を生み出すものとなり、区分所有された高級都市住宅の景観形成手法として波及した (Fig.3)。

5 . 交通施設と都市景観

5 - 1 河川・運河と都市景観

鉄道の論理が都市の空間構造の再編を迫る直前の「運河狂の時代」と言われる17世紀、運河沿いの景観形成は一般市民にも大に関心があることであった。交通の拠点となる場所や多くの交通量が流れる幹線は、水面の幅が広い主要河川でもあり、都市の顔となった。ロンドンのテムズ川に正面を向けているゴシック様式のイギリス国会議事堂や首相官邸、ブダペストのドナウ河畔に建つネオ・ゴシック様式のハンガリー国会議事堂 (1904年) のように、国政の中心地を水辺に立地させている都市が少なくないのはこの時代の影響を物語る。この「見られること」に対する自覚的表現、ファサード即ち正面性を意識した立地は、鉄道の時代になっても持続した。駅舎と駅前広場、駅前通りの関係に代表される交通広場

と基軸街路の組み合わせは、すでに市街地に囲まれた王宮を都市景観の中に位置づける手法として近世に確立されていた。ベルリンのシャルロテンブルグの宮城と前面に広がる市街地はその関係をよく残している。セーヌ川沿いに建設されたパリのオルセー駅(1900年)のように、鉄道駅においても河川側に正面性を持たせる造形意匠が採用された。

5 - 2 鉄道駅の景観

鉄道駅と街路網の関係は、交通路として異なる幾何学的論理を持つため、安易な調律はできなかった。即ち、縦断線形、横断線形ともに道路よりも厳しい制約があり、何よりも駅舎でしか乗降ができないことが、根本的に異なる。裏を返せば、駅舎という建造物を都市空間にどのように持ち込むかが大きな課題となった。鉄道が都市と都市を結びつける高速交通手段として認識されるようになったとき、都市の中にどのように駅を位置づけるかは大きな課題となった。旧市街地を改造して都心まで線路を引き込んでいる時間はなく、どこの都市でも市街地の縁辺部に終端駅、いわゆるターミナルとして建設する結果となった。パリやロンドンの駅舎の位置は当時の都心の縁辺部にあたり、ターミナル駅という形態から、駅舎はその終端部を都市と対峙する形で正面性を備えた形態を持たされることとなり、駅前広場や駅前通りと一体の都市空間を形成するに至った。通過型の駅においてもこの関係は引き継がれ、駅舎の正面性と都市の軸的な街路空間と広場の関係が持ち込まれている。それらは王城や教会、市役所や劇場と都市空間を双対関係にあるものとして整備したときと同じ手法によるものであり、前の時代のバロック的都市計画により一度は完成した都市空間の秩序に対して鉄道が違和感を与える存在となることがないように考慮した結果に他ならない。

6 . 都市空間の脱構築と景観の多様化

6 - 1 20世紀における地縁的景観の解体

アメリカはヨーロッパ・コンプレックスからの脱却という課題を背負って20世紀を迎えた。1893年シカゴが誘致に成功した万国博覧会を契機として建築家パーナムが唱導した都市美運動(City Beautiful Movement)によるシビック・センター(Civic Center)の景観形成や、ニューヨークのセントラルパークを手がけた造園家オルムステッドの公園緑地運動(Park Movement)、あるいは「市民による市民のための芸術としての都市計画」として広まったシビッ

ク・アート(Civic Art)の思想などは、いずれもアメリカ的浪漫主義の産物と言える。そのアメリカの景観がコルビュジェらの機能主義を触発したことは、歴史の反作用として記憶すべきことである。フランスを中心に多くの作品を残した建築家ル・コルビュジェが船で大西洋を渡り、ニューヨークの摩天楼を目の当たりにして建築的自由の謳歌を確信し、「輝く都市」(1922年)の構想の種を宿したとき、それは様式主義に拘束された都市建築の形態的制約からの解放を目指すものとなる。

壁の存在が不可欠である石造建築の形態的制約から未だ自由でなかった鉄とコンクリートによる都市建築に柱と梁、スラブによる形態的自由を獲得させたことは、古典的な都市空間やヴァナキュラーな形態的統辞論から離脱した、都市景観の離散の多様化をもたらす結果となった。

相隣関係を顧慮することなく敷地の中だけで最適化を図ろうとする近代建築に対して、都市計画はさまざまな形態規制により都市景観の統制を図ろうと試みる。中世以来、ある時代に完成を見た都市でその状態が持続してきた欧州では既存の環境が規範となったが、20世紀に初めて本格的に都市の形成期を迎えた新世界では、その規範自体を新たに模索しなければならなかった。アメリカは欧州的近代の超克という目標を持って超高層建築に象徴される20世紀的景観の実現に邁進したが、古典的な都市空間へのノスタルジーが消滅したわけではなかった。1960年代にケヴィン・リンチをはじめとする人間主義的都市論が興隆し、環境心理学者や文化人類学者らが都市空間と人間の間を問い直し始めたのも、機能主義の限界に対する当然の反作用だったと言える。

コンクリートの造形的可能性や鋼構造の巨大化は、すでに産業革命期に志向され、複製の容易化や建造の短期化、部材の工業化は、場所との関係性を希薄化する。普遍性を獲得した国際様式と称する新たな規範が文化を越えて先進的なものとして受容されたのが他ならぬ20世紀であった。景観の多様化と画一化は、実は同一の起源を持つ事象と言える。

6 - 2 計画・設計の境界条件の変化と景観の変容

機能主義や自由主義思想の浸透は、地縁的社会に支えられた伝統的規範に囚われない、異種並存の景観を生み出し、既成のデファクト・スタンダードの解体をもたらす。社会的規範の融解と、輸送力の増大や技術の多様化による都市形成手法の越境は、そ

の傾向を助長し、20世紀の都市はどここの都市も似たような均質的多様性という形容矛盾を景観として露呈するに至る。カナダの地理学者レルフ^{2,8)}が没場所性 (placelessness) と表現した地域越境型の企業活動 (corporatization) による自己主張的な施設建設は、ある場所が別の場所と同じような景観に変貌する事態を生む。バイパス道路沿いの景観が世界中どこへ行っても同じような有り様になる背景には、広域的な企業活動が局地的な景観の基盤である地域社会から乖離した意思決定過程を持っていることが指摘できる。視覚媒体により典型的な都市景観像が伝播し統制力となったルネサンス期や近代初期の状況とは明らかに異なる背景が存在する。

このことは、日本国内における都市景観問題を考える上でも認識しておくべき点であろう。同種の形態を持つものが共存する状況は、社会的規範の浸透と材料及び技術の地域的共通性が前提条件となる。一方、20世紀に世界各地で出現した異種の形態の並存は、社会的規範の崩壊と個別的自由の拡大、そして輸送力の増大に伴う技術の越境と多様化を駆動力とする。普遍的な科学技術への没入的傾斜は、20世紀に作られた都市の均質的多様性という形容矛盾の基底をなしている。このような多元性、多様性は多元的離散化あるいは離散的多元化と言えるだろう。

20世紀末のパラダイム・シフト論は産業革命に匹敵する壮大な社会改革をもたらすと見られた。ポストモダニズムの論陣の一翼を担ったフランスの論客ジャン・ボードリヤールのハイパーセンター論など、脱中心論が状況を正当化するかに見えたが、脱構築された都市空間を再構成する原理は、未だに模索途上にある。

アメリカ合衆国やカナダ連邦は、多元文化主義政策を標榜し、異文化の共存を可能にする多元文化社会の都市空間の形成を意識してきた。しかし実際は帰属する母国社会の文化を共有する人々が集住することによるモザイク化が先行し、それに伴う建築の擬似回帰現象が起きている。これも日本国内における都市景観問題を考える上でも認識しておくべき点であろう。独自性は多様性につながる偏差でもあり、視覚的基調と雑音の両方になりうる。それが景観にどのように現れるかを現代の都市計画は未だに整理できていない。景観を制御する原理を持たない20世紀以来の現代社会の都市こそ、人類が初めて目撃する環境の姿であることは確かである。多元パラダイム論的都市景観論が熟していないのである。

7. 都市空間のシンタクス

7-1 視覚を基軸とした都市空間の統合の課題

歴史的に見れば、人類が作り出してきた都市景観は、地理的立地条件のもとに、建設材料的、並びに技術的な制約の範囲内で最適化を図ることから生まれ、同種共存を基本とする社会的規範が強く働いていた。しかし政治的軍事的な力の強大化や、交通手段の発達による交流範囲の拡大により、地縁的な制約を超越した景観を生み出すことが可能となった。地縁的景観の制約条件からの離脱は新規性への憧憬を動機とする場合が多いことは、すでにバロック的都市に見たとおりである。しかしそれは様式主義という定型化された形態特性上の制約条件の範囲内で都市空間全体として実現されるものであった。他方、機能主義は都市の構成要素を抽象化し、地域的風土性とは無縁の形態を持つ国際様式の建築と結合して、歴史的に形成されてきた景観の解体を多くの国々にもたらした。景観的な文脈から切り出されたデザインを、実現する場所の近隣の空間に対する関係付けすることもなく引用するコラージュ的な手法は、都市景観を脱構築 (deconstruction) し、全体として無定形な都市景観を生じさせる結果となった^{3,11)}。

それを補うかの如くポスト・モダニズム建築において喧伝された文脈主義 (contextualism) と称する設計思想には遺憾ながら敷地という制約を超える力はなく、都市空間に全体的な整合性を回復するには未だ至っていない。Rob Krier^{2,3)}のように古典的な都市空間のタイポロジーから現代都市の空間構造を再編する可能性を模索する研究成果も、欧州ならばこそ有効に働くが、それ以外の文化圏では他の空間構成手法と並列化されるにとどまる。

都市空間の構成はその外形的な様相だけで論じるべきものではないが、景観的なシンタクス (syntax) 即ち統辞論を現代の諸条件に基づいて構築する必要性は高まっている。全体を構造化する文法と、語彙に相当する緻密な構成要素の収集と分析の研究はまだ熟してはいないが、都市景観構成要素の記号論的意味の視覚的整理は、20世紀の都市化社会が残した大きな課題の一つである。

7-2 意思決定と都市景観

日本社会は不平等条約の改正を有利に運ぶことを目論んで欧化主義政策により都市を近代化させるといって荒療治から都市空間の改造に着手した。明治初期に西欧型の都市景観を現出させるために強権的に

整備された銀座煉瓦街(1884年)はイギリス風の街並みを出現させたが、一部の市民の反対により江戸時代から引き継がれた町屋が間に挟まった形になったところもあった。同様の例は西洋の中にも存在する。フランスのボルドー(Bordeaux)では、円形の広場を囲む建築の高さをそろえることができず、高低に統一性がないスカイラインが生み出され、バロック都市としては完成を見なかった景観が今日に至っている。経済的に規範どおりに建設する余力がなくなったからであるが、市民革命後の自由意識の浸透も権力的な統一性への反発を生み出す重要な契機となっている。このような歴史的時差による景観形成の動因の変化は、20世紀に急激に加速した。

日本の都市は、明治以来の欧米的近代化を本格的な形では一度も完成させることなく、突如として20世紀後半の都市化の波をかぶった。バロック的都市計画を経験した多くの都市においては景観に関する具体的な制度が確立されたが、自由主義と民主主義の波及と共に強制的服従から選択と合意形成という社会的意思決定の手続きが変化し、景観に関するルールの確立は都市空間に加わるさまざまな力の中で相対的に困難な局面を迎えるようになった。ガイドラインやマニュアルの功罪も問い直されている。

8. 結語 持続社会の都市景観

欧州のコンパクト・シティ論の潮流やアメリカのニュー・アーバニズムのスマート・グロウス(smart growth)は、人間と自然の時間に同調した変容と持続の制御への関心が高まりつつあることを意味する。持続可能性(sustainability)の精神的基盤は、社会基盤の成熟度にも関係するが、社会が緩慢な変容の流れの中であってこそ、景観を通じて経験された都市空間の安定的継承、即ち場所の持続性への固執が生まれる。そのような継承感覚(sense of heritage)は、結果としての都市景観が好意的に受容されることにより初めて保証される。

しかし、様式主義の都市景観に対する反発から機能主義が生まれ、結果的に都市景観の解体を招いたことは記憶すべきことである。その機能主義もポスト・モダニズムにより批判を受け、現代都市は多元的なパラダイムを内包した状態で景観の再編を思考する複雑な課題を負うこととなった。秩序志向がもたらす慢性化、恒常化に対する反発的破戒への潜在的な傾向は常に意識しておくべきであろう。

自然や人間社会に対する理解が深まっている今日

では、混沌や混乱といわれる事象のメカニズムも研究対象となりつつ、秩序と自由、秩序と混沌の境界も以前とは大きく異なってきている。多様性への許容度が変化するのであれば、景観的な逸脱に対する抑制の基準も変位する。現代都市は古典的な静的景観論から動的な景観論の構築を待っている。

参考文献(アルファベット順)

- 1) Appleton, Jay: The Experience of Landscape, John Wiley & Sons, 1975
- 2) Bacon, Edmund: Design of Cities, Thames & Hudson, 1967
- 3) Barnett, J.: The Elusive City - Five Centuries of Design, Ambition and Miscalculation, Harper & Row Publishers, 1986
- 4) Beevers, Robert: The garden City Utopia - A Critical Biography of Ebenezer Howard, Macmillan Press, 1988
- 5) Benevolo, Leonardo: The History of the City, The MIT Press, 1980
- 6) オギュスタン・ベルク / 宮原信訳 『空間の日本文化』 筑摩書房、1985年
- 7) オギュスタン・ベルク / 篠田勝英訳 『風土の日本 自然と文化の通態』 筑摩書房、1988年
- 8) オギュスタン・ベルク / 篠田勝英訳 『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』 講談社現代新書、1990年
- 9) ヴォルフガング・ブラウエンフェルス / 日高健一郎訳 『西洋の都市 その歴史と類型』 丸善、1986年
- 10) 文化科学高等研究院編 『都市化する力 都市はどのように都市になるか』 三交社、1992年
- 11) Rowe, Colin & Fred Koetter: Collage City, MIT Press, 1984
- 12) トーマス・シャープ / 長素連、もも子訳 『タウンスケープ』 SD選書、鹿島出版会、1972年
- 13) H・ディーテリッヒ、J・コッホ / 阿部成治訳 『西ドイツの都市計画制度 建築の秩序と自由』 学芸出版社、1981年
- 14) 藤森照信 『明治の東京計画』 岩波書店、1982年
- 15) Gehl, Jan: Life between Buildings, Van Nostrand and Reinhold, 1987
- 16) 日笠端 『先進諸国における都市計画手法の考察』 共立出版、1985年
- 17) 樋口謹一編 『空間の世紀』 筑摩書房、1988年

- 18) Hoskins, W. Q. : The Making of The English Landscape, Hodder & Stoughton, 1988
- 19) Hugo Brunt, M. : The History of City Planning - A Survey, Harvest House, 1972
- 20) Jenks, M., Burton, E. & Williams, K. : The Compact City - A Sustainable Urban Form?, E & FN Spon, 1996
- 21) Kostof, Spiro: The City Shaped - Urban Patterns and Meanings through History, Thames & Hudson, 1991
- 22) Kostof, Spiro: The City Assembled - The Elements of Urban Form through History, Thames & Hudson, 1992
- 23) Krier, Rob: Urban Space, Academy Editions, 1979
- 24) Lampl, Paul: Cities and Planning in The Ancient Near East, George Braziller, 1968
- 25) Lynch, Kevin: The Image of the City, MIT Press, 1960
- 26) Morris, A. E. J. : History of Urban Form Before the Industrial Revolutions, John Wiley & Sons, 1979
- 27) Rasmussen, S. E. : London - The Unique City, The MIT Press, 1982
- 28) Relph, E. : Place and Placelessness, Pion Limited, 1976 / エドワード・レルフ著、高野岳彦、阿部隆、石山美也子訳『場所の現象学 没場所性を越えて』筑摩書房、1991年
- 29) Relph, Edard: The Modern Urban Landscape, The Johns Hopkins University Press, 1987
- 30) Rowe, Peter G. : Making a Middle Landscape, The MIT Press, 1991
- 31) エドワード・R・デ・ザーコ著、山本学治、稲葉武司訳『機能主義理論の系譜』鹿島出版会、1972年
- 32) Saiki, T., Freestone, R. & van Rooijen, M. (ed.): New Garden City in the 21st Century?, Kobe Design University, 2002
- 33) Smith, P. F. : The Dynamics of Urbanism, Hutchinson, 1974
- 34) Smith, P. F. : The Syntax of Cities, Hutchinson, 1977
- 35) Tavernor, R. : Palladio and Palladianism, Thames & Hudson, 1991
- 36) Tuan, Yi Fu: Space and Place - The Perspective of Experience, The University of Minnesota Press, 1977
- 37) von Gerkan, Meinhard & BDA, DB - AG, DAZ: Renaissance of Railway Stations - The City in the 21st Century, Vieweg, 1966
- 38) White, Rodney R. : Urban Environmental management - Environmental Change and Urban Design, John Wiley & Sons, 1994
- 39) Wolters, Rudolf: Stadtmitte Berlin, Wasmuth, 1978
- 40) 横山正『透視画法の眼』相模書房、1985年